

思い出す人々

西山 厚 全24回

第2回 【源実朝】

芭蕉が高く評価していた中世の歌人は西行と源実朝だった。鎌倉幕府三代将軍にして優れた歌人、実朝。その存在を覚えてくれたのは父だった。

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や

沖の小島に波の寄るみゆ

父の口から繰り返し生まれ出ては、私に寄せて来る実朝の歌。そのままをそのままに歌いながら現実を超え、深い悲しみの世界に到る。そこには誰もいない。

実朝のエピソードで忘れられないのは、大きな船を造って宋へ渡ろうとした時のことだ。

船はできた。しかし、海まで引き出すことができず、大きな船は砂浜で次第に朽ちていく。実朝はその様子を何度も見に行ったという。実朝の心中を思う。

理想の実現を強く志しながらも、政治の世界から排除され、やがて鶴岡八幡宮で悲劇が起きる。

空や海うみやそらとも見え分かぬ

霞も波も立ち満ちにつつ

霞と波で、空と海との区別がつかない。生と死も、あるいはそのようなものなのかもしれないが。